

パリ高等商科大留学 確かな手応え

私は一昨年8月、交換留学生として「パリ高等商科大学」(Ecole Supérieure Commerce de Paris)(ESCP)に留学しました。フランスでは大学・大学院とは別に、grandes écoles(グランゼコール)



商学部商業貿易学科4年
門倉 美奈子

高等専門学校)という機関があります。grandes écolesの大半は私立です。パリ高等商科大学はその中のトップ3といわれ、「大企業で活躍する人のほとんどがgrandes écolesの卒業生」といわれるほど将来を約束され、また、そのために努力している学生が集まっています。

ルイ・ヴィトンで職場体験

パリに着いて、いきなり「中央大学は日本で一番目? それとも2番目?」と聞かれました。なぜ、こんな質問をするのか、私にはわかりませんでした。そこで「なぜ? 学部によるし、簡単に順位はわからないの。一番、二番目じゃないことは確かだけど……」と答えると、「フランスで最も優秀といわれているうちの提携校だから、そんなことはないでしょ? 日本人はすぐ、謙遜するんだから!」……私は、そこに彼らのESCPの学生としての誇りの高さを見た思いがしました。

見上げた勉学への意欲

確かに彼らの勉強への意欲の高さは相当なものです。授業の予習・復習はやつて当然。彼らを見てると「日本では学生がこのように真面目に勉強に取り組んでいる学校は一体幾つあるのだろう」と思わざるを得ませんでした。私は在学中、ずっと

「売り切れ」でも、「さよなら」だけ すべての価値観違う

でも、私はそんなパリが好き

そんな刺激を受けていました。フランスではインターンシップのことをstage(スタージュ)といいます。

「学生が企業で働く経験を積む」というコンセプトは、日本と同じですが、いくつか異なる点があります。その1つは学生と企業、そして学校の三者による契約のもとに行われるという点です。

企業の面接で採用が決まると、stageをする資格がある学生であるかどうかを学校が決定します。契約書に学生と企業、学校のサインがそろって初めて契約成立です。契約書には「責任を持って仕事をすること。学問に継続的に励むこと。企業は学生の権利を尊重し、十分な経験を積める機会を多く与えること」といった内容が書かれています。

この制度があることを知って、一昨年12月にさっそく「LOUIS VUITTON」の門を叩きました

た。私は言語力が充分でなかったため、オフィスでフランス人と同様の仕事をやる自信はまったくありませんでした。

しかし、毎日のように日本人客が来るLOUIS VUITTONで



す。私なりの役に立てると思ったのです。あっけなく採用が決まりました。さすが、知名度が高い名門校のバリ高等商科大学です。

そこで感じたのは、フランスでは階級社会がインターンシップにも、

Ⓛ 学校の前でクラスメイトと
(右から2番目が筆者)
Ⓜ LOUIS VUITTON の同僚と



そのまま出ていたことです。給料の差も「トップ3」とそれ以外では、格段の差があるそうです。ある意味

日本人が来ないと潰れちゃうよ

さて、LOUIS VUITTONでのインターンシップの始まりです。学校の授業を週3日、残りの3日をインターンシップに充てました。私が働いていた店舗は百貨店の中の小さなお店でしたが、1日平均300人の来客がありました。仕事内容は主に接客、在庫管理、マーチャンダイジングです。高価なものを扱うために防犯上の理由から「1人の販売

売員につき1組のお客様」という体制をとっておりました。そのため、中に入るためにも列を作らなければならず、ひどい時で3時間も待つていただけではないこともありました。とにかくアジア人客が多いのです。全体の7割と聞いたところでしょか。残り半分が日本人と聞いたときは、フランスにおけるブランドビジネスの特徴を見た気がしました。

「日本人が来なくなったら、ウチは潰れちゃうよ」と、冗談まじりにいっていた店長の言葉も、あながち嘘でなかったのかもしれない。2〜3月には特に修学旅行の大学生が目立ちました。日本から持ってきたカタログを店内で広げて買い物をしている不思議な光景もここでは日常的なものでした。

これらの仕事に加え、私にはもう一つ通訳という仕事がありました。

では、日本以上に学歴差がまだ強いという意外な面を垣間見た感じがしました。

言葉が通じないお客様や販売員を助けることです。これは想像以上に大変で、日本人とフランス人の接客についての考え方の違いから、私は非常に苦労しました。そのため、「たとえ3時間待っていたとしても、ないものはない。売り切れ、さようなら」。実に素っ気ない対応も、フランスでは当然のことなんです。

多国籍国家フランス

日本ではこうはいきません。「売り切れだったら、なぜ謝らないのか」「3時間待たせたのだから、どうにかして用意しろ」など……。私も日本人なので、その怒りは充分理解できます。しかし、状況は変わるわけではありません。ひたすら謝って帰っていただくだけでした。

小さい店舗なので、従業員も全部で40人しかいませんでした。その中に100%フランス人（生まれも育ちも両親も）というのは10人弱しかいません。その中にはアルジェリア人、ドイツ人、イラン人、ベトナム人、カンボジア人、イタリア人、ロシア人と、さすがに「多国籍国家フランス」を充分体感しました。

フランスはその歴史から、非常に移民が多く、また、外国人にとつて住みやすい国として有名です。中にはフランス国籍ほしさに偽装結婚をする人もいると聞きました。フランスでは一定の条件を満たせば、離婚後もフランス国籍を維持し続けられるそうです。パリは離婚率50%といわれていますが、その理由は「恋愛大国フランス」だからだけではない

エッフェル塔の下で さよならパーティー

教養が高かったり、両親がフランス人でない場合や、国境近くに住んでいる人は3〜4か国語も当たり前になってきます。そのため、普段はフランス語を使い、共通の外国語を話せる者同士なら、その言葉を使います。英語を使う場合は英語しか話せない人と会話する時だけです。ヨーロッパに在る限り、そういう機会は非常に少なくなっています。たくさん外国語を話せたり、外国

そうです。さまざまな国籍を持つ人が多いため、スタッフ同士の会話も国際色豊かなものでした。意外だったのは英語での会話に触れる機会が少なかったことです。よくフランス人は英語を話さないという話を聞きますが、そうではなく、話す必要がないのだと思います。ヨーロッパに住む人は大抵、母国語と英語を話せます。

人に接する機会が多いと、それを国際的だと私たち日本人は考えがちですが、ヨーロッパ人からすると、それは日常生活のごく一部でしかないようです。習得した外国語を自分の国で使う機会が多い点は、非常にうらやましいと思いました。

私のニックネーム

帰国が迫っていた私は、6月末でインターンシップを終えることにし

ました。最終日の前日、お店の開店2周年を祝うパーティーがエッフェル塔の公園で開かれ、私の送別会も一緒にしてくれたことが忘れられません。

フランスでは挨拶（会った時と別れる時）頻りにキスをしますが、お祝い事や気持ちを強く表現する時にも同様にキスをします。この時は本当にキスの嵐でした。

当初は緊張したこの挨拶にもしっかりと馴染んだこと、そして何より私との別れを惜しんでくれていることに驚き、そして感激しました。同僚の一人が、私のことを「アジアから吹いてきた若い風」と表現してくれましたが、その言葉のように、私は5か月間という短い滞在で、LOUIS VUITTONを離れました。しかし、この社員の方たちが、パリの思い出を一層、強いものにしてくれました。中途半端だった私のフランス語を使えるフランス語に上達させてくださったことにも感謝しています。

「パリ高等商科大学」「LOUIS VUITTON」の皆様、本当にお世話になりました。